

戦国大名権力構造の研究◆目次

序 章	戦国期大名権力研究の視角	3
第一節	戦国大名の概念規定をめぐって	3
第二節	「戦国期守護論」について	8
第三節	戦国大名と「戦国領主」	15
第四節	本書の論点と構成	20
第一章	毛利氏の山陰支配と吉川氏	33
はじめに		33
第一節	吉川氏の発給文書	36
第二節	吉川氏の「家中」と毛利氏	50
おわりに		53
第二章	毛利氏の山陽支配と小早川氏	86
はじめに		86

第一節	尾道浄土寺鐘相論	87
第二節	小早川氏と山陽の「戦国領主」	106
第三節	小早川「家中」と毛利氏	113
おわりに		123

補論一	「小早川家座配書立」について	146
-----	----------------	-----

第三章	毛利氏の「戦国領主」編成とその「家中」	169
-----	---------------------	-----

はじめに		169
第一節	「戦国領主」の「家中」の様相	171
第二節	「戦国領主」の「家中」と毛利氏	185
おわりに		198

第四章	一六世紀後半の地域秩序の変容	207
-----	----------------	-----

はじめに	——備後地域における地域経済圏と「領」——	207
第一節	備後地域における地域経済圏の展開	211
第二節	備後地域の「戦国領主」と地域経済圏	216
第三節	一六世紀後半における備後南東地域の変容	223

おわりに		230
------	--	-----

第五章	戦国期における領域的支配の展開と権力構造	238
-----	----------------------	-----

はじめに		238
第一節	「戦国領主」の「領」	241
第二節	大名支配下での領域支配の展開	254
第三節	領構造がもたらす戦国期の特質	257
おわりに		263

補論二	中近世移行期における大名権力の性格づけをめぐる	291
-----	-------------------------	-----

はじめに	——片桐昭彦『戦国期発給文書の研究』を素材に——	291
第一節	片桐昭彦『戦国期発給文書の研究』の検討	293
第二節	中近世移行における武家領主権力の支配の性格づけをめぐる	299
おわりに		307

終章	戦国期の特質を考えるための権力試論	313
----	-------------------	-----

はじめに		313
第一節	戦国期研究における支配の二元論	314

第二節 中世史研究における支配の二元論……………	327
第三節 戦国期の構成的支配と権力関係……………	374
おわりに……………	392

本書の成り立ちについて

あとがき

索引(人名・地名・事項、研究者)

〔略称一覧〕

各章の註や表の中で用いる史料について、出典を次のように略記する。また、史料原本で確認したものもあるが、活字化あるいは、公刊されているものについてはなるべくそれをあげた。

- ・『萩藩閥閥録』…閥
 - ・同右所収「防長寺社証文」…防長寺社証文
 - ・『萩藩閥閥録遺漏』…閥遺
 - ・『大日本古文書 家わけ第八 毛利家文書』…毛利家文書
 - ・『大日本古文書 家わけ第九 吉川家文書』…吉川家文書
 - ・同右所収「吉川家文書別集」…吉川家文書別集
 - ・同右所収「石見吉川家文書」…石見吉川家文書
 - ・『大日本古文書 家わけ第十一 小早川家文書』…小早川家文書
 - ・同右所収「小早川家証文」…小早川家証文
 - ・『大日本古文書 家わけ第十四 熊谷家文書・三浦家文書・平賀家文書』所収「熊谷家文書」…熊谷家文書
- 文書
- ・同右所収「三浦家文書」…三浦家文書
 - ・同右所収「平賀家文書」…平賀家文書
 - ・『大日本古文書 家わけ第十五 山内首藤家文書』…山内首藤家文書
 - ・『大日本古文書 家わけ第二十二 益田家文書』…益田家文書
 - ・『広島県史 古代中世資料編Ⅱ』…『広島県史Ⅱ』
 - ・『山口県史 史料編 中世2』…『山口県史2』
 - ・『島根県史 第七卷・第八卷』…『島根県史7・8』(同書は史料番号がないので頁数と、その頁の何点

序章 戦国期大名権力研究の視角

第一節 戦国大名の概念規定をめぐって

本書は戦国期の権力諸関係を、主として戦国大名と、戦国大名配下の「戦国領主」(国衆)の権力構造から解明しようとするものである。

主として一六世紀を中心とした戦国期は、いうまでもなく日本列島地域を戦乱が覆った時代であり、軍事的暴力のむき出しの行使が絶えず見られた時代であった。⁽¹⁾すなわち多様な権力関係の中で暴力の規定性が高まった時期といえることができる。こうした軍事的暴力の行使としての戦争は主として各地に成立した地域権力の間で戦われた。地域権力の中でも、関東の後北条氏や、中国地方の毛利氏のように、特に有力なものは、従来の多くの研究で戦国大名と呼ばれている。戦国大名はそれぞれの地域において諸領主層を編成し、政治的統合を推し進めた。⁽²⁾こうした統合は、軍事的暴力を集約化し、地域秩序形成にも影響を与えたはずである。本書は、主として戦国大名の諸領主層編成について検討することで、戦国期社会における権力の作用のあり方を解明することを意図している。

ところで、いわゆる戦国大名をめぐっては、これまでも重厚な研究の蓄積があるにもかかわらず、いまだ戦国大名概念は十全な規定がなされるにいたっていない。これは多くの研究が、後北条氏、毛利氏といった一六世紀

の有力な武家領主権力を無前提的に戦国大名と規定した上で、戦国大名とは何かと問いを発してきたからではないだろうか。戦国期の大名権力を研究する前提として、この問題を考えておきたい。

戦国大名の研究史に関しては池享氏の的確な整理がある。⁽³⁾ 池氏の整理を概括すれば、これまでの戦国大名研究は、戦国大名を近世大名の先駆的形態と見て、戦国期と近世との連続性を主張する「連続説」と、戦国大名を中世の最終段階に位置づけ中世と近世との断絶面を強調する「断絶説」が交互に繰り返されてきたという。池氏は「これらを克服するには、問題を社会構成体の次元に還元して二者択一的に裁断することなく、連続と断絶を多次的に総合した大名領国制構造論・中近世移行論が必要である」として、こうした二者択一的な視角からの脱却を提唱している。本章の意図も連続か断絶か、換言すれば中世のか近世のかを論じることにはなく、ここでは前述の戦国大名概念の規定の問題と密接に関わって、従来の研究視角が持つている問題点を指摘することに主眼があるが、その問題点として、次のふたつをあげることができる。一点目は、戦国大名が中世のか近世のかという論じ方をする事によって、戦国期に固有な特質をとらえようとする視点が弱かったこと。二点目は、戦国大名と呼ばれている個々の権力の差異を、それぞれの特質として認識しようとする意識が薄かったことである。これらは相互に関連している。

一点目の問題は、すでに以前から指摘されてきたところである。村田修三氏は、池氏の整理にいう「連続説」を批判して、戦国大名の固有の特質を解明するべきだと主張した。村田氏は、戦国大名を中世から近世へ移行する時期の過渡的なものとする評価を、「近世大名の諸属性を戦国大名の中に検出していくという、近世史に寄生した研究方法」と批判し、「戦国大名の歴史的特質こそが明らかにされねばならない」と論じている。⁽⁴⁾

戦国大名が中世のか近世のかという論じ方は、個々の権力の差異を、それぞれの特質として認識できないという第二の問題点を生じしやうい。特にそれは「連続説」に顕著である。「連続説」は戦国大名と織豊政権ないしは近世大名との連続性を強調することによって、戦国大名を、近世大名を到達点とする単線的な発展段階の中に位置づけてしまうからである。

たとえば勝俣鎮夫氏の議論は戦国期以前と以後とで時代区分をする点で「連続説」にあたる。勝俣氏はまず、戦国法の成立について、一揆契状の誓約事項を大名の法に、一揆の絶対性を大名の絶対性に転換させたものとする。⁽⁵⁾ その上で、戦国大名が「国家」という支配理念を創出したことを重視して、戦国大名は「国家の存続を至上目的とし、国家のためと称してその構成員に対し国家への忠誠を強制し、その政策を国家の意思としての国法というかたちで実現させようとし」、大名自身は「国家」の護持者として、みずからを「国家」の頂点に位置づけていくとする。⁽⁶⁾

こうした議論に対しては、山室恭子氏の次のような批判がある。山室氏は、戦国大名および織豊政権の発給文書の様式の分析から、戦国大名を毛利氏などを典型とする「西国型」と、後北条氏などを典型とする「東国型」に分類した。そして、勝俣氏は、一揆の中から戦国大名権力が成立してくる過程を説明する際には「西国型」の毛利氏を用い、「国家」を専制的に支配する大名の様相を論じるときには「東国型」の後北条氏を用いて、前者から後者への発展として戦国大名を説明するが、これは、異質なものを発展として説明したものであるとする。⁽⁷⁾ 毛利氏↓後北条氏↓織豊政権という単線的な発展で戦国大名を評価すれば、毛利氏と後北条氏の差異は、個々の特質とはとらえられず、発展段階の差に置き換えられてしまう。

後北条氏を例に、戦国大名の先駆的性格、すなわち近世大名との共通性を見た場合、後北条氏と違う状態にある戦国大名は、必然的に「遅れている」という評価になり、それが近世大名の先駆形態である戦国大名である以上、やがて発展すれば後北条氏のようになると説明されざるを得ない。こうなると「遅れている」と評価された大名は、早晩後北条氏や織豊政権のような状態に発展する過渡的権力ということになるし、それぞれの大名の違

本書の成り立ちについて

本書は二〇〇四年度に大阪府立大学大学院文学研究科に提出した博士論文と、その後発表した論考をもとに加筆・修正し、新稿を加えたものである。既発表論文については、大筋の論旨を修正したのは第四章のみであるが、いずれも、その後の知見による加筆、発表後いただいたご指摘も踏まえた事実関係の誤りの修正、および各章の重複部分の削除、用語や註の統一などの改稿をおこなっている。詳しい変更内容については、各章の付記を参照されたい。ここでは、初出論文との関係を示しておく。

序章は、「戦国大名研究の視角——国衆「家中」の検討から——」（『新しい歴史学のために』二四一号、二〇〇一年四月）に、大幅に加筆したものである。既発表部分の論旨は変えていないが、加筆部分に合わせて再構成している。

第一章は「戦国期毛利氏の山陰支配——吉川氏発給文書の検討から——」（矢田俊文編『戦国期の権力と文書』、高志書院、二〇〇四年二月）をもとに加筆・修正したものである。「はじめに」の一部を序章に移したほか、一部内容を補筆・修正している。

第二章は「安芸国衆小早川氏「家中」の構成とその特質」（『古文书研究』五二号、二〇〇〇年一月）の第二章に大幅に加筆したものであり、ほぼ新稿である。既発表部分は本章第三節に当たるが、これについても修正を加えている。なお、加筆部分の一部は、二〇〇四年に、大阪府立大学大学院文学研究科／都市文化研究センター・COE-Aチーム第二〇回研究会で報告した内容をもとにしている。

補論一は「安芸国衆小早川氏「家中」の構成とその特質」の第一章に若干加筆したものである。内容はほぼ変更していない。なお、これは、一九九九年の日本古文书学会大会で報告した「小早川家座配書立」についての

検討」がもとになっている。

第三章は「毛利氏の「戦国領主」編成とその「家中」(『ヒストリア』一九三号、二〇〇五年一月)を若干変更したものである。「はじめに」の一部を序章に移したほかは、ほとんど変更していない。表1の「戦国領主」家臣一覧は追補している。なお、これは二〇〇四年の大阪歴史学会大会での報告を文章化したものである。

第四章は「中・近世移行期の備後地域の地域構造」(『歴史科学』一六八号、二〇〇二年四月)を大幅に修正したものである。論旨も一部変更している。また、「はじめに」の一部は序章に移した。これは、二〇〇一年の大阪歴史科学協議会大会での報告を文章化したものである。

ここまですがほぼ博士論文としてまとめた内容である。

第五章は「戦国期における領域的支配の展開と権力構造」(『日本史研究』五五八号、二〇〇九年二月)に補筆したものである。これは二〇〇八年の日本史研究会大会での中世史部会共同研究報告をもとにしている。大会報告のレジュメに付けた地図を、『日本史研究』掲載時には割愛せざるをえなかったが、本書に収録するにあたっては、その地図を掲載したほか、初出時には紙幅の関係で削除した引用史料なども、改めて掲載した。また、地図作成にあたっての史料の典拠を新たに示すなどの補足をしている。

補論二は「戦国織豊期上杉権力発給文書と毛利権力発給文書の共通性と差異性——片桐昭彦『戦国期発給文書の研究』を素材に——」(『新潟史学』五五号、二〇〇六年五月)を改題の上、内容はほぼそのまま収録している。これは、二〇〇五年の室町・戦国・近世初期上杉氏史料研究会で報告した内容をもとにしている。

終章は、まったくの新稿である。ただし、一部の論点については、折に触れて言及したこともある。

なお、本書は直接出版費の一部として独立行政法人日本学術振興会平成二三年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の交付を得て刊行されるものである。

あとがき

本書は戦国期の大名分国を対象とした権力論である。その根底には、歴史的に、あるいは現代において、権力というものをどうとらえるかという問題関心がある。もちろん、はじめから、このような課題意識に明確に焦点が合っていたわけではない。ただ、研究をはじめた当初から、個別大名研究ではなく、なるべく普遍的な、あるいはアクチュアルなテーマをもって研究したいという思いだけはあった。

京都府立大学文学部史学科に入学した頃は、まだ日本史を専攻するかどうかさえ決めかねていた。戦国大名を研究しようと決めたのは、そろそろ卒業論文のテーマを決めようかという三回生のときに、たまたま矢田俊文氏の「戦国期甲斐国の権力構造」を読んで衝撃を受けたのが大きい。最も著名な戦国大名ともいえる武田氏を、戦国大名ではなく、戦国期の守護ととらえるべきであるという戦国期守護論の主張に、それまで自明のものと考えていた戦国大名という存在についての認識そのものを揺さぶられたからである。と同時に、戦国期、社会が大きく変化するなかで擡頭してくる戦国期の大名権力は、やはり何か室町期の守護とは違うものなのではないかという素朴な疑問も抱いた。以降、戦国期守護論を乗り越え、新たな戦国大名概念を構築することを、研究の一つの目標にしたのであるが、当初抱いた疑問はさすがに素朴にすぎた。そもそも当の戦国期守護論についての理解が浅かったので、卒業論文などは今思えば、まったく戦国期守護論への適切な批判になっていないのだが、その後一貫して、戦国期守護論と向き合いながら研究を進めていく中で、徐々に研究史への理解が深まり、その過程

で問題関心の焦点も合っていた。

本書はそうした試行錯誤から得た、自分なりの一定の到達点を示そうとしたものであるが、終章に結論ではなく、あえて試論を置いたように、それはまだまだ通過点である。あるいは、アクチュアルな問題関心を持ちながら研究を続ける限り、おそらくゴールなどないというべきであろうか。

本書を成すにあたっては、たいへん多くの方にお世話になった。

京都府立大学でご指導いただいた上田純一先生は、やりたいことはあるが、どうしたらいいかがさっぱりわかっていなかった私に、史料や論文を紹介してくださった。卒業論文がどうにか形になったのは先生からいただいた示唆に負うところが大きい。

その後、大阪市立大学大学院の前期博士課程と後期博士課程では、仁木宏先生にご指導いただいた。文書や戦国法の講読で、史料の読み方の基礎を学び、内容を徹底的に読み込むことを教わった。また、仁木先生のゼミ合宿や遠足は、綿密に下調べをし、現地をこれまた徹底的に歩くというもので、この経験も大きな糧になった。そして何より、ゼミで報告した際には、常にいろいろな角度から質問を投げかけ、研究の視野を広げていただいた。権力を研究するのに、直接領主権力だけを見てはだめだということを教わった。

また、古代史の榮原永遠男先生、近世史の塚田孝先生、近現代史の広川禎秀先生のゼミにも出席させていただき、ことに塚田先生のゼミでは、戦国期を理解する上で欠かせない近世史の知識を得ただけでなく、論文を読み込むということはどういうことなのかを学んだ。

博士課程の終わり頃から、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターで働くことになったが、そこでは市沢哲氏にたいへんお世話になっている。日本史研究会の大会報告をしたときなどには、いろいろ相談に乗って

いただいたし、日常的な雑談の中でもいろいろ研究のヒントをいただいた。日々の職場で刺激が得られるというのは幸運なことだと思う。

大阪市立大学の諸先輩も、いつも親身になってアドバイスをくださった。大村拓生氏は、私の研究報告の問題点をいつも正確に見抜き、いちばん痛いところを突く質問をされる、ごまかしのきかない先輩で、言い方を変えれば報告を聞いていただくのこれほど信頼できる相手はない。廣田浩治氏には、泉佐野市史の編纂でもたいへんお世話になったが、研究の面でも、私があるとき考えていることを何か一つ聞けば、それを十にも二十にもふくらまして答えてくださった。故西村幸信氏には、移行期村落論についてご教示いただいたほか、くずし字を読む手ほどきを受けた。いまだにくずし字を読むのがあまり得意ではないのは、ひとえに私の努力不足だが、それでもまがいなりにも読めるのは西村氏のおかげである。そして何より、古野貢氏には、いちばん近い先輩として多方面でお世話になった。修士課程と博士課程の違いはあったが、大阪市立大学の大学院に入ったのが同じ年で、最初の仁木先生の門下生でもある。一緒に勉強会などを企画することも多く、その点で、ともに学んできたという感覚もあるが、やはり、私の方が引張ってもらった部分が多い。このほか、専門分野の近い天野忠幸氏をはじめとして、後輩たちからも多くの刺激を受けた。

戦国期守護論批判から研究をはじめたにもかかわらず、矢田俊文氏、川岡勉氏、小谷利明氏と、なぜか戦国期守護論の立場の研究者からご教示をいただく機会も多かった。いずれも、私の疑問に真剣にお答えくださり、それが研究を進めていく上で、たいへん励みになった。

そして、私の研究者としての姿勢に最も大きな影響を与えているのが、京都府立大学の同級生の福島在行氏と山崎寛士氏の二人である。福島氏が日本近現代史、山崎氏が東洋史と、それぞれ専門分野がまったく違うので、理論的な部分に関して議論したり、勉強会を開いたりすることが多かった。そうした議論の中身だけでなく、お

互いの存在も刺激になっていたと思う。私の理論に対する関心や、研究への向き合い方は、この二人の存在抜きには語れない。

このほか学会関係その他で学恩をこうむった方々をあげればきりがない。皆様にお礼申し上げたい。

本書の刊行にあたっては、思文閣出版の原宏一氏、田中峰人氏に、何かとお世話いただいた。地図や表など、ややこしい原稿が多く、いろいろご迷惑をかけたが、いつも適切な解決策を示していただいた。

最後に、何も言わず、行きたい道に進ませてくれた両親に。私がこうして研究を続けていられるのも、あらゆる面での両親の支えがあつたことである。この場を借りて感謝を申し述べたい。

二〇一二年二月五日

村井良介

た行	
高木昭作	57, 58, 302, 303, 326, 345, 422, 423
高橋修	335, 357
高橋一樹	362~364, 414, 415
高橋幸八郎	381
高橋哲哉	312
高橋典幸	353~355
高橋昌明	412
竹井英文	397
館鼻誠	34, 38, 39, 42, 44, 86, 106, 107, 109, 125, 195
谷重豊季	237
田沼陸	269
田端泰子	247, 249
田村憲美	354, 361
チェイエット、フレドリック・L	409
鶴見俊輔	369
デリダ、ジャック	324, 326, 347, 359
ドゥルーズ、ジル	393
戸田芳実	328, 330~334, 341, 356, 361, 377, 378
富山一郎	392
な行	
中田薫	362
永原慶二	301, 314, 316, 329, 347, 348, 362, 405
成田龍一	417
仁木宏	210, 265
西尾和美	191
新田一郎	349~354, 358, 360, 361, 363
貫成人	425
則竹雄一	266, 316, 370, 388, 394
は行	
ハート、ハーバード・L・A	403
長谷川博史	9, 11, 14, 19, 25, 34, 53, 54, 56, 107, 125, 179, 195, 228, 257, 273,

	380, 384
長谷川裕子	264, 394
長谷部恭男	323, 396
馬部隆弘	175
ひろたまさき	417
フーコー、ミシェル	31, 133, 265, 336~341, 344, 345, 348, 350, 372, 393, 398, 403, 404
深谷克己	324, 397
藤井昭	95~97
藤井譲治	303, 308, 397
藤木久志	17, 19, 21, 209~211, 222, 237, 239, 241, 242, 318, 319, 322, 324, 342, 376, 378, 394, 403, 411
藤田達生	322, 380
古澤直人	350, 405
ブローデル、フェルナン	425, 426
ヘーゲル、ゲオルク・W・F	426
ベンヤミン、ヴァルター	324~326, 359, 397, 418
星野智	336
保立道久	363, 364
ホップズ、トマス	264, 298, 318~322, 336, 346, 369, 370, 371
ホワイト、ステイブ・D	408

ま行

前原茂雄	96, 97
松井輝昭	95~97, 104
松浦義則	43, 227, 304, 311, 379
松岡久人	25, 216
マルクス、カール	22, 389, 390, 426
丸山眞男	302, 303, 420
三浦圭一	207
水林彪	20, 21, 29, 269, 314~316, 378, 422
光成準治	29, 262
峰岸純夫	29, 242, 243, 296
宮島敬一	310
武藤直	233

ムフ、シャンタル	22, 347, 391
村田修三	4, 12, 13, 265, 292, 393

や行

矢田俊文	8~16, 18, 19, 23, 24, 29, 35, 41, 113, 124, 126, 150, 169~174, 201, 208, 232, 233, 238~240, 244, 252, 295, 310, 311, 315, 317, 335, 357, 379, 381, 387
山口啓二	210, 265, 388
山田徹	395
山田康弘	29, 385
山室恭子	5, 27, 292, 295, 296, 299, 301, 302, 398
山本隆志	355

山本浩樹	384
湯浅治久	315
吉川真司	307, 308, 422
吉田伸之	424

ら行

ラクラウ、エルネスト	22, 347, 391
ルーマン、ニクラス	313, 325, 326, 340, 349, 350, 358, 387, 389, 392
ルクセンブルク、ローザ	391

わ行

脇田晴子	208
和田秀作	173

山内豊通	248, 268
湯浅氏	107, 219
湯浅将宗	180
湯氏	245
温泉英永	268
湯原氏	42, 44, 56, 57, 125, 196, 197, 297
湯原春綱	39, 44, 50, 56, 57
吉見氏	179, 184, 197, 245, 248, 250~ 252, 254, 259~261, 298
吉見正頼	250, 268
ら行	
冷泉氏	179, 245
冷泉元豊	268
わ行	
渡辺氏	217, 219, 220, 226~228, 234
和智氏	219, 245
和智豊郷	268

【研究者名】

あ行	
青木茂	95~97, 128
アガンベン、ジョルジュ	
	133, 324, 339, 348, 373, 415
秋山伸隆	40, 52, 56, 95, 96, 121, 132, 133, 172, 173, 175, 202, 219, 221, 260, 261, 301, 305, 307, 380
朝尾直弘	17, 169~171, 305, 374~377
浅倉直美	271
浅田彰	368, 416, 418
網野善彦	95~97, 357, 361, 364~367, 369, 416, 417
荒川善夫	295
安良城盛昭	324, 366
有光友學	27, 386
アルチュセール、ルイ	
	22, 345, 347, 389~391, 393, 407
アルトホーフ、ゲルト	408
アンダーソン、ベネディクト	411
家永遵嗣	11, 21, 28, 317, 318, 382, 383
池上裕子	6, 7, 23, 59, 207, 369, 373, 424
池享	4, 7, 11, 13, 19, 21, 34, 52, 107, 125, 172, 173, 175, 189, 205, 239, 265, 266, 272, 292, 303, 316, 374, 377, 378, 388, 423
石井進	
	328, 329, 332, 343, 362, 375~377
石田晴男	205, 372, 385
石母田正	52, 272, 301, 302, 304, 307, 308, 398, 407, 410, 426
市沢哲	357, 360, 372
市村高男	241, 385
伊藤俊一	30, 207, 264, 372, 373
稲葉継陽	296, 298
今岡典和	
	8~11, 205, 310, 315, 317, 382, 384

今村仁司	367~369, 373, 390, 416
入間田宣夫	249, 328, 329, 333, 334, 399, 400, 409, 411
岩本正二	234
ウェーバー、マックス	
	300, 304, 404, 405
上野修	273, 319~321, 346, 370~372
ウォーラーステイン、イマニユエル	
	425
榎原雅治	372
エンゲルス、フリードリヒ	
	22, 347, 389, 390, 393, 406, 407, 426
大山喬平	23, 26, 328~334, 342~344, 354, 355, 361, 375~378, 380, 381, 400, 401, 405

か行

海津一朗	358
笠松宏至	350, 360, 361
片桐昭彦	26, 272, 291~293, 295, 296, 299, 302, 303, 305, 307, 308
片山清	95~97, 104, 128, 234
勝俣鎮夫	5, 16, 21, 169, 292, 301, 303, 366, 367, 369, 373, 394, 422
加藤哲	271
加藤益幹	129, 273
鎌倉佐保	414
鴨川達夫	175, 236
萱野稔人	273, 298, 303, 319, 321, 325, 348, 359, 372, 387, 426
河合正治	32, 86, 107, 111, 113, 173, 219
川合康	336, 344~346, 354
川岡勉	8~14, 54~56, 251, 310, 315, 317, 383, 385, 386, 424
河音能平	328, 331~334, 341~343, 354, 361~363, 377, 378
河村昭一	35
菊池浩幸	18, 23~25, 35, 53, 120, 170, 174, 191, 419
岸田裕之	187, 221, 273

木村信幸	35~37, 40, 50, 51, 57, 59, 108, 205, 236
工藤敬一	334, 335, 361, 412
久保健一郎	241, 255
クラウゼヴィッツ、カール・フォン	
	345
グラムシ、アントニオ	345, 347
蔵持重裕	388, 403
久留島典子	17, 19, 239, 274
黒田俊雄	347, 348, 407
黒田基樹	16~18, 29, 55, 170, 238, 241, 242, 254, 255, 265, 273, 316~318, 336, 367, 369, 370, 417
ケルゼン、ハンス	396
ゲルナー、アーネスト	411
河野勝	408
小島道裕	398
小谷利明	357
小林一岳	358

さ行

齋藤慎一	271
佐伯徳哉	257
佐々木中	340, 403
佐々木銀鈴	209, 212, 213, 236, 357
佐藤進一	36, 301, 307, 328, 330, 332, 342, 343, 376, 377, 405, 419~422
三田武繁	419~421
志田原重人	213
柴辻俊六	266
清水克行	411
下津間康夫	233
杉田敦	322, 323, 336, 363, 372, 396
鈴木敦子	
	208, 210, 211, 221, 236, 265, 357
鈴木国弘	356, 357, 410, 411
鈴木康之	233
鈴木良一	407
盛山和夫	336, 338, 341, 350
妹尾周三	96

305
 木梨氏 88, 95~97, 99, 104~107, 111, 122, 126, 128, 197, 201, 218~223
 木梨隆盛 128
 木梨元恒 93, 95, 96, 111, 129, 298
 草刈氏 195
 熊谷氏 179, 181, 193, 245
 熊谷信直 181, 184, 268
 熊谷元直 193
 構成的支配 23, 26, 328~330, 334, 335, 338, 341, 342, 344, 354~358, 361, 374, 377~381, 383~388, 391, 401, 405, 406, 409, 411, 414, 415, 424
 河野氏 191
 古志氏(出雲) 245
 古志重信 268
 古志氏(備後) 107, 222, 229
 小早川隆景 24, 37, 44, 49, 57, 86, 88~93, 95~99, 103, 104, 106~113, 117~121, 123~125, 130, 131, 159, 185, 187, 189, 190, 192, 194, 197, 226, 228, 231, 297, 298, 305
 後北条氏 3, 5~8, 23, 55, 198, 209, 211, 241, 243, 255, 256, 261, 272, 292, 424

さ行

猿懸 256, 267, 271
 佐波氏 197, 245
 佐波広忠 193, 268
 宍戸氏 174, 182, 267, 298
 渋川氏 217, 220, 267
 清水氏 107
 清水景治 123
 清水宗治 123
 庄氏 245, 256, 271
 庄元資 268
 浄土寺 86~88, 93~97, 103~106, 112, 122, 126, 197, 219, 221
 「自力の村」論 21, 238, 240, 298, 315, 316, 318, 322, 324, 336, 369, 370,

372, 374, 388, 394, 417
 志芳衆 180~182
 宍道氏 179, 245
 宍道政慶 268
 杉氏 179, 182, 245
 杉重清 268
 杉重輔 194
 杉重良 182
 杉原氏 179, 190, 201, 217, 222, 223, 225~228, 235, 245, 258, 298
 杉原景盛 190, 222, 223, 226, 258
 杉原景保 223
 杉原(山名)理興 223, 226, 234, 235
 杉原元盛 190, 223, 226
 杉原盛重 223, 224, 226, 235, 268, 311
 周布氏 184, 193
 周布元兼 268
 戦国期守護論 8, 9, 13, 16, 20, 21, 23, 238, 239, 301, 315~317, 336, 382, 383

た行

多賀氏 194, 196, 245
 多賀経長 268
 多賀元忠 194
 多賀元龍 194
 高須氏 107, 123, 159, 190, 201, 222
 高須景勝 190
 多賀山氏 184, 206, 245
 多賀山通統 184, 268
 武田氏(安芸) 179, 259
 武田氏(甲斐) 9, 10, 13, 241, 292, 294~297, 317
 田総氏 179
 都野氏 193, 194, 196, 245
 都野家頼 193, 194, 196
 都野長弼 268
 富田 38, 44, 125, 227, 228, 262, 272, 297, 311
 頼 212, 213, 216, 220, 223~230

な行

内藤氏 179, 190, 192, 234, 245, 261
 内藤興盛 192, 268
 内藤隆春 192, 311
 内藤隆世 192
 檜崎氏 123, 159, 222
 南条氏 38~40, 190, 226, 245
 南条宗勝 190
 南条元統 190, 268
 乃美宗勝 88, 106, 109, 117, 120, 122, 130

は行

甘日市 93, 95, 96, 104~106, 209, 219, 221
 平賀氏 182, 184~187, 192, 195, 196, 203, 222, 245, 261, 298
 平賀隆宗 186, 203
 平賀隆保 186, 203
 平賀広相 185, 186, 203
 平賀弘保 203, 268
 平賀元相 182, 203
 平川氏 182
 福屋氏 38, 42, 99, 245, 250, 257, 258
 福屋兼清 268
 福屋隆兼 250
 福頼氏 42
 穂田元清 93, 99, 104, 120, 193, 197, 256, 267, 271, 272

ま行

益田氏 179, 182, 184, 193, 197, 245, 248~252, 254, 262, 270
 益田兼堯 270
 益田貞兼 270
 益田尹兼 268, 270
 益田元祥 196
 三浦氏 187, 202
 三浦元忠 187

三沢氏 179, 245
 三沢為国 268
 三沢為忠 268
 三隅氏 38, 184, 245, 248
 三隅興兼 268
 三刀屋氏 245
 三刀屋久扶 268
 宮氏 112, 213, 217, 245
 宮政盛 268
 三吉氏 213, 245
 三吉隆亮 268
 三吉致高 268
 村上氏(因島) 107, 108, 110, 111
 村上吉充 108
 村上氏(能島) 108
 村上景親 108, 123
 村上景広 123
 村上武吉 108, 123
 室町幕府-守護体制 8~12, 15, 249, 316, 385
 毛利興元 203
 毛利隆元 37, 49, 87~93, 97~99, 103, 105, 106, 112, 118, 119, 121, 124, 129, 181, 185, 186, 191, 192, 203, 216, 224, 250, 259, 304
 毛利輝元 39, 40, 50, 52, 108, 110, 111, 117, 119, 120, 186, 190, 193, 203, 225, 228, 258, 298, 305
 毛利(富田)元秋 44, 122, 192, 272
 毛利元就 24, 34, 37, 51, 52, 86, 88, 92~99, 103~106, 117, 119~122, 126, 127, 129, 159, 179, 181, 185, 186, 191, 192, 194, 198, 215, 216, 220, 223, 250, 256, 258, 259, 304, 305, 384
 毛利元康 223, 226~231, 258, 262

や行

山内氏 179, 184, 187, 189, 213, 217, 245, 248, 249, 254, 268, 311
 山内隆道 184

◎著者略歴◎

村井・良介 (むらい・りょうすけ)

1974年、大阪府生まれ。1997年、京都府立大学文学部史学科卒業。2005年、大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程日本史学専攻修了。博士(文学)。2010年より神戸大学大学院人文学研究科特命助教。

【主要業績】

『戦国期の権力と文書』(共著、高志書院、2004年)、『新修泉佐野市史 第4巻 史料編古代・中世Ⅰ』(共著、泉佐野市、2004年)、『新修泉佐野市史 第1巻 通史編 自然～中世』(共著、清文堂、2008年)、『新修神戸市史 歴史編Ⅱ 古代・中世』(共著、神戸市、2010年)、『香寺町史 村の歴史通史編』(共著、姫路市、2011年)

せんごくだいまりょうけんりよくこうぞう けんきゅう
戦国大名権力構造の研究

2012(平成24)年2月20日発行

定価：本体7,000円(税別)

著者 村井良介

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781(代表)

印刷 亜細亜印刷株式会社
製本

©R. Murai

ISBN978-4-7842-1610-9 C3021

索引

【人名・地名・事項】

あ行	
赤穴氏	56, 57, 196, 197, 245
赤穴久清	268
阿曾沼氏	182, 190, 193, 245, 298
阿曾沼弘秀	268
阿曾沼広秀	127, 198
尼子氏	11, 14, 24, 42, 56, 57, 97, 117, 196, 223, 272, 380
天野氏	179~182, 189~191, 193~196, 201, 245
天野興定	181, 184
天野隆綱	194, 268
天野元定	181, 191, 194
天野元政	191, 193, 194
天野(保利)氏	39, 42, 179, 180, 193, 201, 245
天野隆重	38, 39, 44, 198, 311
天野元明	268
有地氏	159, 217, 222
伊賀氏	107, 245
伊賀家久	192, 268
出羽氏	191, 201
井上春忠	91, 110, 113, 117, 122, 148, 189
今川仮名目録追加	11, 315, 317, 386
今川氏	11, 12, 14, 15, 315, 387
上杉氏	6, 7, 9, 13, 14, 201, 272, 292, 294~296, 299~301
上杉景勝	295, 296, 300, 306

上杉謙信	294, 295
上原氏	89~92, 94~97, 99, 104~106, 112, 122, 126, 129, 197, 218, 219, 221, 245
上原豊将	88, 93, 98, 105, 128, 218, 268
上原元将	89, 91, 93, 94, 96
馬屋原氏	179
大井八幡宮	251, 270
大内氏	54, 55, 172, 173, 179, 186, 194, 195, 223, 224, 259, 365
大内義隆	192
大友氏	24, 97
小笠原氏	192, 193, 195, 245, 246, 257
小笠原長隆	268
小笠原長旌	192
織田氏	24, 34, 38, 39, 41, 50, 99, 105, 109, 190, 221, 366
織田信長	6, 296, 366
尾道	86, 88~90, 92, 94~98, 103~105, 197, 209, 210, 212, 213, 215, 216, 218~223, 228, 229
か行	
笠岡	212, 216, 223~227, 229, 230
神辺	201, 213, 217, 222~231, 234, 235, 236, 245, 258, 262, 298
吉川広家	37, 40~43, 54, 59, 227, 228, 231, 262
吉川元長	37, 38, 40~44, 57, 59, 190
吉川元春	24, 34, 35, 37~44, 49~52, 107, 109, 110, 121, 125, 185, 187, 189, 190, 192, 194, 195, 197, 227, 252, 297,